

言語文化研究科

I	教育水準	教育 22-2
II	質の向上度	教育 22-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、学生定員が常に充足しており、また社会人学生と留学生が多いことは（社会人経験者は大学院博士前期課程で 20～30%、大学院博士後期課程で 50%、留学生は前期後期とも 20%前後）、言語文化の習得にとって大きな利点であり、大阪外国語大学からの教員移籍もさらに広範な言語文化教育にとってプラスに作用すると判断されるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、研究科教員が教育賞を数多く受賞していることにも反映されているように、大学院教務委員会及び外国語教務委員会が中心となって、年次ごとの研究指導プログラムの整備、講演会やセミナー、合宿研修をはじめとするファカルティ・ディベロップメント（FD）への取組は特筆に価するなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、特定の領域に偏らず、また選択自由度の高い適切なカ

リキュラムが設定されており、同時に、学生がより広範な知見を獲得するためのカリキュラムの多様化も追求されている点も評価できるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、留学生や社会人等、多様な入学希望者に対応する入学試験や教育コースが用意されており、またアジアや欧米の諸大学と単位互換制度を含む学生交流を可能にしている点も、言語文化研究科として適切な措置であるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、社会の需要に応える様々な教育コース（4通りの標準的履修コース）を用意するとともに、課程博士号授与率を高めるために、論文執筆のためのオリエンテーションを含む細やかな研究指導プログラムを整備し、現実にそれが実効性を発揮していることは特筆に価するなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、学際的で多様な授業を学生が主体的に選択して履修できるカリキュラムとなっており、また学際的領域を対象とする研究科の特徴を踏まえて、2名の指導教員を中心に複数教員による指導体制が取られるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、厳密な研究指導プログラムを設定することにより、平成 19 年度において大学院博士前期課程修了生、課程博士学位授与者数がかなり減少している（「大学情報データベース」参照）が、課程博士学位授与率が人文学系研究科として高い数値を示していることは評価できるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、アンケート対象者の数が多くはないが、総じて授業内容についての満足度が極めて高く、優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、大学院博士前期課程修了生は高度専門職業人として就職しており、大学院博士後期課程修了生の就職率も、人文系若手教員の就職状況の厳しさを考えれば、平成16年度は75%、平成17年度は85%の就職率は妥当な数値であるといえるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、より広範な対象からの評価を得ることが期待されるが、実施された外部評価から判断する限り、おおむね肯定的な評価結果を得ているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が3件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が1件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。